Materials in this study were the films of orthopantomography which were taken for medical treatment of 16 patients aged 20 to 49 with maxillary sinusitis. Apicoectomy region showed radioopaque image rather than non-apicoectomy region of the floor of maxillary sinus in orthopantomography. The region of apicoectomy of diseased tooth near the floor of maxillary sinus showed radioopaque image to high positin rather than another diseased tooth free from the floor of maxillary sinus in orthopantomography.

37. 下顎骨の再建症例に関する臨床的検討

○崎元 盛泰・黒川 英雄・山下 善弘・梶山 稔
九歯大・口外2

私たちは下顎骨の再建症例について、切除範囲、移植材料（移植骨、医用生体材料）、固定法、固定材料、術後の経過などの臨床的な検討を行ったので、その概要を報告する。

対象症例は1981年から1996年までの過去16年間に当科で下顎骨切除を行い、下顎骨再建術を施行した69症例。

調査結果は下顎骨再建症例が男性32例、女性37例の平均年齢53.3歳（19歳から79歳）であった。適応症例は悪性腫瘍が43例（62.3%）、良性腫瘍が16例（23.2%）、嚢胞性疾患が7例（10.1%）、その他が3例（4.4%）で、切除範囲では下顎骨辺縁切除が14例（20.3%）、下顎骨区域切除が46例（66.7%）、下顎骨半側切除が8例（11.6%）、下顎骨全切除が1例（1.4%）であった。再建法は金属プレートのみが30例（43.5%）、移植骨のみが22例（31.9%）、移植骨＋金属プレートが17例（24.6%）で、即時再建が55例（79.7%）、二次再建が14例（20.3%）であった。金属プレートを応用した47例のうち、初期ではステンレスあるいはチタン製のメッシュトレーが13例（27.7%）、キルシュナーが2例（4.3%）、最近ではAOあるいはライビンガーの再建用プレートが32例（68.1%）であった。なお、軟組織再建との併用は10例（14.5%）であった。術後の経過では、感染が9例（13.0%）、金属プレートの露出が47例中4例（8.5%）で、移植骨あるいは金属プレートを除去した症例が6例（8.7%）であった。

Analysis of reconstruction of mandibular defects using autogenous bone graft and/or metallic reconstruction plate

Moriyasu Sakimoto, Hideo Kurokawa, Yoshihiro Yamashita and Minoru Kajiyama (Second Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Kyushu Dental College)

Reconstruction of mandibular defects was performed on 69 patients in our department during the 16 years from 1981 to 1996. The patient's ages ranged from 19 years to 72 years (mean, 53.3 years). The sex was 32 males to 37 females.

There were immediate reconstruction on 55 cases and secondary reconstruction on 14 cases. This report describes our experience using various reconstruction procedures and the functional outcome is analyzed, with attention to associated early and late complication.

38. 九州歯科大学第1口腔外科における顎裂患者への2次的自家腸骨海綿骨移植の臨床的検討

○嶋村 知記・富永 和宏・福田 仁一
九歯大・口外1

九州歯科大学附属病院第1口腔外科では1994年7月から唇顎裂および唇顎口蓋裂患者の顎裂部に対し、2次的自家腸骨移植術をはじめ、1998年12月までの間に21例、28顎裂について施行してきた。今回、われわれはそれらの経過と臨床的検討を行ったので報告する。

患者内訳は男性9例、女性12例で、手術時年齢は8歳から20歳（平均年齢12.8歳）であった。裂型別内訳は片側性唇顎裂10例、片側性唇顎口蓋裂1例、両側性唇顎裂1例、両側性唇顎口蓋裂7例であった。手術目的別内訳は鼻・口腔瘻孔の閉鎖、犬歯の萌出誘導、鼻翼基部の陥凹修正等であった。入院期間は最短14日、最長29日（平均20.3日）であった。治療成績の評価には術前、術直後、術後6ヵ月以上経過時のX線写真を用いて移植骨の生着状